日本ロシア文学会

関東支部報 No. 39（2021 年 5 月）

〒162-8644 東京都新宿区戸山 1-24-1 早稲田大学文学学術院 八木君人研究室気付
日本ロシア文学会関東支部事務局
E-mail: kanto.yaar@gmail.com

【ご挨拶】

来る 2021 年 6 月 5 日（土）13 時より、昨年度と同様、ZOOM を用いたオンラインの形で、日本ロシア文学会関東支部研究発表会を開催いたします。６本の修士論文成果報告と、２本の博士論文成果報告がおこなわれます。その後、支部総会も開催する予定です（残念ですが、懇親会はありません）。参加ご希望の方は下記 URL のしめす申込フォームに必要事項をご記入のうえ送信してください（登録完了後、zoom 接続情報等を含む確認メールが届きます）：
https://zoom.us/meeting/register/tJIlf-isqz8vG9weg2ex29vf54c3b3hZ8BA9

本報に発表要旨を収録しております。どうぞふるってご参加ください。

沼野恭子

【研究発表会プログラム】

13:00 開会：支部長挨拶

［修士論文成果報告］

13:10-13:40 **中岩 諒**（東外大院） 司会： **阿出川 修嘉**（上智大）
「ロシア語の比較級を用いた文における基準と対象の格の合致について」

13:45-14:15 **新田 愛**（東大院） 司会： **梅津 紀雄**（工学院大）
「『想像の西側』としての J. S. バッハ――A. シュヴァイツァーの『バッハ』露訳（1964）受容を事例に」

14:20-14:50 **佐藤 大雅**（東外大院修士課程修了） 司会： **鈴木 正美**（新潟大）
「アゼルバイジャンにおけるジャズと、〈ジャズのメッカ〉の誕生について」

14:55-15:25 **赤渕 里沙子**（早大院） 司会： **伊藤 愉**（明治大）
「A. B. ルナチャルスキーの『新しい宗教』と文化政策」

15:30-16:00 **粟生田 杏奈**（東外大院） 司会： **熊野谷 葉子**（慶應大）
「19～20 世紀ロシア文化に見られるクマの表象」

16:05-16:35 **豊島 美波**（カレル大院） 司会： **伊藤 愉**（明治大）
「ヴァーツラフ・ハヴェルの『ガーデンパーティー』と『通達』における不条理
――世界の見方の転換手段として」

［博士論文成果報告］

16:40-17:15 **五月女 颯**（日本学術振興会特別研究員） 司会： **八木 君人**（早大）
「ジョージア近代文学研究におけるポストコロニアリズムの諸問題
――ポストコロニアル・環境／動物批評の試み」

17:20-17:55 **笹山 啓**（筑波大学） 司会： **貝澤 哉**（早大）
「脱出の希望、反逆の技法――ヴィクトル・ペレーヴィンのデビューから現在までを読む」

18:00-18:30 支部総会

日本ロシア文学会 関東支部報 第 39 号

目次

【支部長 巻頭言】

沼野 恭子 「文学と歴史学のせめぎあい」 3

【研究発表会 報告要旨】

修士論文成果報告

中岩 諒 「ロシア語の比較級を用いた文における基準と対象の格の合致について」.....4

新田 愛 「『想像の西側』としての J. S. バッハ
——A. シュヴァイツァーの『バッハ』露訳（1964）受容を事例に」.....5

佐藤 大雅 「アゼルバイジャンにおけるジャズと、〈ジャズのメッカ〉の誕生について」.....6

赤渕 里沙子 「A. B. ルナチャルスキーの『新しい宗教』と文化政策」 7

粟生田 杏奈 「19～20 世紀ロシア文化に見られるクマの表象」.....8

豊島 美波 「ヴァーツラフ・ハヴェルの『ガーデンパーティー』と『通達』における不条理
——世界の見方の転換手段として」.....9

博士論文成果報告

五月女 颯 「ジョージア近代文学研究におけるポストコロニアリズムの諸問題
——ポストコロニアル・環境／動物批評の試み」.....10

笹山 啓 「脱出の希望、反逆の技法
——ヴィクトル・ペレーヴィンのデビューから現在までを読む」 11

【規約・執行部】

日本ロシア文学会 関東支部 規約 12

現行執行部 13

【支部長　巻頭言】

文学と歴史学のせめぎあい

沼野恭子（東京外国語大学）

コロナ禍が長引き、ついに 2 年目に突入した。もちろん感染症のパンデミックは人類にとって危機的なものだが、ふと世界を見まわすと、この災厄を克服すべく協力しあうどころか、逆に分断や差別を煽り、強権を発動して弱者を抑圧している指導者がかなりいる。新型コロナウイルス以上に危険なのではないか。地球は大丈夫だろうか。

「ヨーロッパ最後の独裁者」という不名誉な形容語句で呼ばれる権力者に対して、ベラルーシの人々は、2020 年 8 月の大統領選以来ずっと粘り強く平和的なデモで抗いつづけている。なにしろ、「コロナはウォッカでやっつければいい」などとうそぶく男である。この人と素面で闘うのは至難の業だ。案の定、デモ参加者の多くは、拘束されるか国外に逃れるかのいずれかを余儀なくされている。反ルカシェンコ派の精神的支柱となり「権力移譲調整委員会」の主要メンバーでもある作家スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチも亡命せざるを得なくなった。現在ドイツに滞在しており、2020 年夏の「革命」について新しい本を書いているという。

その本もやはり証言から成る作品になるのだろうか。気になるところだ。

というのも、私が今最も関心を寄せているのが、文学と歴史学のせめぎあいだからである。フランスの歴史家イヴァン・ジャブロンカが『歴史は現代文学である――社会科学のためのマニフェスト』（2014）で、実証的な科学とされている歴史学に、文学的特性である虚構を「方法のためのフィクション」として持ち込むことを提起して話題になったことは記憶に新しい。ふつう歴史に「物語性＝虚構」を取り入れるのは、真理を探究するための妨げになると見なすものだが、ジャブロンカは、事実調査の過程を可視化するなどして物語性が生まれることをむしろ歓迎しているようだ。そもそも「歴史＝実証科学」対「文学＝フィクション」という二項対立を前提にすること自体が無意味なのか。

ジャブロンカが歴史学の側にいて文学的手法を取り入れているとしたら、アレクシエーヴィチは、証言を記録するというジャーナリスティックな手法を駆使しているうちに文学の側にやってきた人といえるかもしれない。彼女は、自分の作品は「オーラルヒストリーとはまったく違う」と述べている。それなら『苦海浄土』を記した石牟礼道子は、もともと文学の側にいて水俣病という題材を追ううちに記録文学へと近づいた人だから、アレクシエーヴィチとは方向性が逆ということになる。アレクシエーヴィチは記録から文学へ、石牟礼は文学から記録へ。

いずれにしても、アウシュヴィッツ以後、水俣以後、そしてチェルノブイリ以後、詩を書くことは野蛮なのか、そうでないのか、歴史と文学の曖昧な境界領域で、テオドール・アドルノの言葉が今ふたたび検証されているような気がする。

【研究発表会 報告要旨】（修士論文）

ロシア語の比較級を用いた文における基準と対象の格の合致について

中岩 諒（東外大院）

ロシア語の比較級を用いた構文（比較級構文）においては、基準（比較級により比べるもの）を表す方法として、чем によるものと生格によるものの二つが存在する。本発表においては、чем における基準表示に注目する。чем による基準表示は、基準と対象（比較級により比べられるもの）の格が合致するとされているが、合致しない例も存在する。基準と対象の格の合致の違いを示すために、Rappaport (1986) による先行研究では、「чем は前置詞である」と分析している。本発表においては、この Rappaport (1986) の主張を批判し、「чем は接続詞である」ことを主張する。

はじめに、Rappaport (1986) の主張について概観する。Rappaport (1986) は、比喩表現に用いられる как（～のような）という語の振る舞いについて議論しているが、чем の統語的な分布は「比喩の как と正確に一致する」と言及している。これを踏まえた上で Rappaport (1986) の主張を見る。

Rappaport (1986) では、как (чем) が「名詞句以外を補語にし、さらに補語に格付与をしない前置詞」であるとしている。そして、格付与については「結合対象」（linkage target）と「結合領域」（linkage domain）という二つの概念を提唱、定義している。結合対象が как (чем) の結合領域になければならず、結合対象が項（argument; ここでは名詞句か前置詞句）のとき基準（ここでは как や чем の補語）と対象（ここでは結合対象）の格が合致し、そうでないときは無標の主格になるとしている。

以上が Rappaport (1986) による提案であるが、本発表においては、以下の 2 点について問題点を指摘した。

(1) a. 名詞句以外を補語とし、格付与がなされない前置詞の例として как と чем 以外は主に英語の例と、ごくわずかなロシア語の例しか挙げられていない。

b. 再帰代名詞の振る舞いを考えると、そもそも чем が前置詞であると考えることが不適切。

(1a) について、格付与をしない前置詞の補語にはどこから格を付与するのかについて、Rappaport (1986) では結合対象と結合領域を定義したが、「格付与をしない前置詞」という特殊なものについての現象を説明するために結合領域などのような特殊なものを想定すると理論をいたずらに複雑にすることになる。(1b) について、再帰代名詞が чем に後続する例が非文法的となる。これは、чем が前置詞であると仮定すると、生成文法における束縛理論と矛盾する。

本発表では、「чем は接続詞である」と分析したことにより (1) に挙げた問題が解決される。(1a) について、чем を接続詞と分析することで、「名詞句以外を補語とし、格付与がなされない前置詞」を想定する必要がなくなり、結合領域や結合対象による理論的な複雑さを回避することができる。また、(1b) については、чем を前置詞ではなく接続詞であると分析することにより、束縛理論に合致させることができる。

参考文献

Rappaport, G. C. 1986, “On the Grammar Of Simile: Case And Configuration”, *Case in Slavic*, eds. R. D. Brecht and J. S. Levine, pp, 244-279, Columbus, Slavica

Timberlake, A. 2004, *A Reference Grammar of Russian*, Cambridge University Press

【研究発表会 報告要旨】（修士論文）

「想像の西側」としての J. S. バッハ
——A. シュヴァイツァーの『バッハ』露訳（1964）受容を事例に

新田 愛（東大院）

本発表は、ソ連の音楽美学における J. S. バッハ理解と作品解釈を、アルベルト・シュヴァイツァー（1875-1965）の書籍『バッハ』受容の観点から検討する。

「西洋音楽の父」ヨハン・セバスティアン・バッハは、クラシック音楽大国のソ連でも重視された。ソ連にはバッハ弾きとして世界的に高く評価された演奏家が複数おり、創作領域でも、バッハ等の西洋の古典が手本とされた時期があった。その一方で、作品の多くが宗教的題材を持ち、カントルであったバッハの創作と人物像は、しばしば無神論イデオロギーと齟齬をきたし、問題視された。

ソ連におけるバッハ作品の解釈に関しては既に複数の先行研究が存在するが、これまで明らかになったのは、無神論イデオロギーに合致するようにバッハの宗教的側面を矮小化した、言わば「ソヴィエト的」解釈の成立過程だった（このような解釈はスターリン期に確立したとされる）。しかし、それ以外の傾向や、スターリン死後に発展したバッハ解釈は検討されていない。

そこで本発表は、先行研究が検討しなかった「非ソヴィエト的」解釈に焦点を当てる。注目するのは、アルザス出身の神学者でオルガニストのシュヴァイツァーが書いた『バッハ』だ（1905 年に仏語で発表、1908 年に著者自身が独語で大幅な増補改訂）。この本は、バッハをプロテスタントにとどまらない超宗派的キリスト教の作曲家として位置づけ、歌詞を持つ作品（カンタータやコラール前奏曲）を取り上げて、主に宗教的な歌詞の内容が音楽において「音画」モティーフで描かれていることを実証した。この本はソ連で 1934 年と 1964 年の 2 回翻訳されており、特に再訳は当時「爆発的」人気を呼び、現代に至るまで長く参照されている。

本発表は、1964 年の再訳がポスト・スターリン期のソ連で引き起こした反響に着目する。シュヴァイツァーのアプローチを取り入れたソ連の音楽学者、演奏家、作曲家の解釈を検討すると、2 つの共通点が見えてくる——彼らはシュヴァイツァーと同様、バッハの作品に宗教的象徴を見出したが、(1) シュヴァイツァーのアプローチを、彼が検証していない《平均律クラヴィーア曲集》等の歌詞を持たない純粋器楽曲に適用した。(2) シュヴァイツァーがバッハの信仰心から来ると想定した作品の宗教的象徴を、より漠然とした「宗教」、すなわちバッハ本人の信仰も自分たちの信仰も超越した特殊な精神世界の表象に読みかえた。

上記の現象の考察に、本発表は文化人類学者アレクセイ・ユルチャクの「想像の西側」論を用いる。これにより、ポスト・スターリン期のソ連でシュヴァイツァーのアプローチが複数の音楽家に採用されたのはなぜか、また、これが純粋器楽曲に適用されたのはなぜか、そして、このアプローチの援用によってバッハとその作品に読み込まれた精神世界とは何だったのかを明らかにし、ポスト・スターリン期のソ連で発展した宗教的バッハ解釈の詳細を解明する。

【研究発表会 報告要旨】（修士論文）

アゼルバイジャンにおけるジャズと、〈ジャズのメッカ〉の誕生について

佐藤 大雅（東外大院修士課程修了）

本発表では、2020 年度に東京外国語大学に提出した修士論文「〈ジャズのメッカ〉の誕生：アゼルバイジャンにおけるジャズのオントロギー」の概要を報告する。ここでは、拙修士論文の概略を示すことで発表要旨と代えたい。

アゼルバイジャンの首都・バクーは、古くから「ジャズのメッカ」として知られてきたにも拘らず、「アゼルバイジャンにおけるジャズ」は研究史上、ソヴィエト・ジャズ≒ロシア・ジャズの傍系とみなされてきた。先行研究を含むあらゆる言説にあっては、アゼルバイジャンがロシアと較べて相対的に小国であるという認識から逃れられず、かつまた、本来的に無関係な既存の思考的枠組みと接続しようとするばかりで、どれも正鵠を射たものだとは言い難い。

拙論にあっては、まず「アゼルバイジャンにおけるジャズ」を一現象として捉え直すことで、かくのごとき本質とはおおよそ関係のない議論を排除し、ソヴィエト・ジャズとの関連を示唆しつつも、それとは独立したものとして「アゼルバイジャンにおけるジャズ」を浮き彫りにする。また、拙論はその構造上、第二章における天才的ピアニストの誕生を「偶然的要素」、第三章における都市論的ジャズ論を「必然的要素」とし、それらが第一章で概観した歴史の根柢になるという、おおよそ循環的な関係に収まるように書かれている。

第一章では議論の前提となる「アゼルバイジャンにおけるジャズ」の略史を確認する。第二章では、アゼルバイジャンに偶然誕生した天才的ピアニスト、ヴァギフ・ムスタファザデの生涯を辿りつつ、「ジャズ・ムガム」について検討する。「アゼルバイジャンにおけるジャズ」の傑出した特徴は、「国民的ジャズ」を創出したという点である。アゼルバイジャンのミュージシャンたちによって「国民的ジャズ」の創出が企てられ、幾度となく伝統音楽「ムガム」と、「ジャズ」の融合が試みられてきた。特筆さるべくは、「ジャズ・ムガム」スタイルを確立したピアニスト、ヴァギフ・ムスタファザデによるものである。ヴァギフが創造してみせたそれは、「国民的ジャズ」として結実する。本章では、少々議論の余地のある「国民的ジャズ」≒「ジャズ・ムガム」の概念と、その生成の過程についても議論し、「ジャズのメッカ」の誕生の背景を明らかにする。

第三章では、「アゼルバイジャンにおけるジャズ」を都市論的に考察し、バクーが必然的に「ジャズのメッカ」となった可能性について考究する。ヴァギフ・ムスタファザデは自身が「ミュージシャンになった理由」について尋ねられた時、「なぜなら、ママがいて、海と城砦があったから」と答えている。ヴァギフの言う「海と城砦」とは、それぞれカスピ海とバクーの旧市街のことを意味する。「国民的ジャズ」の創設者たるヴァギフに、都市が影響を与えたということ。つまりそれは、バクーという都市そのものがもとより「ジャズのメッカ」たるポテンシャルを備えていた可能性を示唆するのである。

【研究発表会 報告要旨】（修士論文）

A. B. ルナチャルスキーの「新しい宗教」と文化政策

赤渕 里沙子（早大院）

本発表では、昨年度提出した修士論文「A. B. ルナチャルスキーの『新しい宗教』と文化政策」全体の概要と、その一部である第 3 章「『笑い』による『新しい人間』の創造」の部分を抜粋して報告する。

修士論文では、ルナチャルスキーが十月革命以前に唱えていた「新しい宗教」概念を鍵として、1920 年代の文化理念がいかなるものであったか、またその理念にしたがってルナチャルスキーがどのように文化政策を進めてきたかを論じた。第 1 章と第 2 章では、1900 年代初頭にルナチャルスキーが著書『宗教と社会主義』で唱えた「新しい宗教」とはいかなる概念であったかを、当時の宗教ルネサンスと呼ばれる潮流のなかに位置づけながら検討した。さらにその「新しい宗教」の理念をルナチャルスキーが革命以後にも表現を変えつつ主張し続けていたことを明らかにした。

今回取り上げる第 3 章では、そのように革命以前からルナチャルスキーの考え方の中心にあり続けた「新しい宗教」としてのマルクス主義理解が、実際に国の文化に携わる際にいかなる形で具現化されたかに目を向けた。1929 年にスターリンとの確執により教育文化大臣を離任させられたルナチャルスキーは、その後すぐに風刺ジャンル研究委員会の創設に乗り出している。「世界文学、また他の芸術様式における、古代から現代に至るまでの風刺ジャンルの歴史と理論について調査する」という趣旨をもったこの委員会への尽力からもわかるように、ルナチャルスキーは当時喜劇・風刺作品によって大衆の意識形成を促すことを考えていた。彼はその前提として、笑いという行為の社会的機能について検討しており、笑いによる集団内部からの心理的統一を目指していた。その試みはさきほど述べた風刺ジャンル研究委員会の活動にくわえ、喜劇文学創作の奨励などにもあらわれており、前章までで論じた「新しい宗教」の理念、つまり人間の心理的育成による集団形成という考えの実践であるとも言える。

ルナチャルスキーは笑いによる「新しい人間」の育成を社会主義リアリズム論においても重要な観点として主張しており、ルナチャルスキーの死後に本格的に進められた社会主義リアリズム芸術への影響も見過ごせない。本発表ではこれら「新しい宗教」に基づいて唱えられた笑いによる人間育成の試みについて、当時のソ連における笑いをめぐる状況と関連付けながら論じる。

【研究発表会 報告要旨】（修士論文）

19～20 世紀ロシア文化に見られるクマの表象

粟生田 杏奈（東外大院）

本発表ではクマが登場する 19～20 世紀ロシアの文学・映像作品に焦点を当て、各作品におけるクマの描写を分析し、何故これらの作品で動物のクマのモチーフが取り上げられているのかを考察する。

クマはロシアにおいて伝統的に重要な動物であり、古代異教時代には畏敬の念を以て崇拝された。森林の食物連鎖の頂点に立つクマは「森の王」として畏れ敬われる一方で、人間のように二本脚で立つ様子から「毛皮を着た人間」とも考えられ、「畏れ」と「親近感」、二つの相反する印象を持ってロシアの人々はクマに対して接していた。

10 世紀末にロシアがキリスト教を受容して以降も、クマに関連した慣習が消滅することはなかったが、教会や権力者による異教弾圧の影響のために、クマは人の手でも従わせることのできる獣だというイメージが浸透し、サーカスの見世物でクマが活躍するようになると、クマは「滑稽な愚か者」とも見なされるようになった。「森の王」と「親しき隣人」、そして「愚か者」という多岐にわたるクマのイメージは、後世のロシア作品におけるクマの描写に影響を与えることとなる。

ロシア文学隆盛期である 19 世紀頃からクマ表象を用いた作品は存在している。クルィロフやシチェドリンらの寓話においてクマは滑稽な愚か者の役割を演じており、トラブルメーカーとしての印象が強い。またチェーホフは『熊』という戯曲の中で、人間たちの傍若無人ぶりや滑稽な振る舞いをクマに喩えている。

20 世紀以降の作品になると、クマ表象は人間自身の感情描写のために用いられるようになる。詩人マヤコフスキーは 1923 年発表の『これについて』において、大きな悲しみのためにクマに変身してしまった自分自身の姿を描き、1930 年にはプラトーノフが小説『土台穴』で、人間と共に鍛冶場で働くクマを登場させ、クマの姿を通して人間の持つ両義性を描き出した。亡命詩人ツヴェターエワは 1934 年発表の詩の中で見知らぬ地で孤独に暮らす自分の姿をクマに喩えている。また、ソ連国営スタジオのアニメ作品『ヴィニー・プーフ』のように、クマの滑稽さを以て、明るくコミカルにクマの姿を描いた作品も存在する。

このように 19 世紀から 20 世紀にかけてのクマ表象を扱った作品の様相は多岐にわたるが、その変遷にはある一定の流れが存在する。19 世紀作品のクマ表象は主に「他者の性質」を表現するために用いられる傾向にあるが、20 世紀作品の場合は作者が抱いた「主観的な情動」を表現しており、個人が自己の中に抱えている感情や本質がクマの姿を通して表現されている。描写対象に差異はあるものの、どの時代のクマ表象も人の有様をクマに喩えていたという点では共通する。人間もクマも互いに恐ろしい側面を持ちながらも、時には愛らしさ、親しみやすさを発揮するなど複雑な印象を抱えた存在である。それ故にロシアの作家たちはクマ表象を以てその時代を生きる人々の姿を描き出したのだと考えられる。

【研究発表会 報告要旨】（修士論文）

ヴァーツラフ・ハヴェルの『ガーデンパーティー』と『通達』における不条理
——世界の見方の転換手段として

豊島 美波（カレル大院）

チェコの劇作家ヴァーツラフ・ハヴェル（Václav Havel, 1936-2011）は、チェコにおける不条理演劇の代表者として知られている。「不条理」は彼の劇作全体のライトモチーフだが、特に 60 年代、プラハのナ・ザーブラドリー劇場での公演向けに書かれた初期の作品の中で、作品集『議事録 Protokoly』に収録された『ガーデンパーティーZahradní slavnost』と『通達 Vyrozumění』は、ジャンルとしての「不条理演劇」の特徴をもっとも明確に兼ね備えていると同時に、類似するテーマや舞台設定がみられる。本発表は、この二作品に表れている「不条理」の本質を考察することを目的とする。

ハヴェルにおける「不条理」概念を理解する上で鍵となるのは、同じく『議事録』に収録された「ギャグの解剖 Anatomie gagu」という論考である。無声映画のギャグの構造分析を、「異化」概念を援用して行ったこの論考では、ギャグは「非人間化するオートマチズム」に「人間性を取り戻すオートマチズム」が衝突することによって引き起こされ、その結果、不条理の感覚がもたらされるという。異化効果に注目していることから、ここでハヴェルは世界の見方を転換する手段として「不条理」を捉えていることがわかる。

『ガーデンパーティー』と『通達』において描かれる、「非人間化するオートマチズム」とは、官僚主義的システムである。二つの戯曲の中では、この「システム」は二面性をもって現れる。システムの内的な権力は、覆い隠され、不在であるかのように見える一方、その外的なあらわれとしての人間の行為、言語は、無意味なまま増殖し、飽和する。前者は内的な論理的整合性を狂いなく保ち、矛盾することがないのに対し、後者は自律的な論理を欠き、意味を喪失し、まさに「不条理」の感覚を引き起こす。つまり、現実のレヴェルで表出する「不条理」の母体となるのは、姿のない、しかし非常に合理的で整合性のとれた、システムの内的なロジックである。このように、表面的には一枚岩に見える社会の状態に、その表と裏の二面性を見出すという立場は、「世界の見方の転換」を可能にする「不条理」の例であるとともに、のちのハヴェルのエッセイにおける権力の考察にも通底する。

本発表では戯曲テクストから以上の「非人間的なメカニズム」の二面性を読み解くとともに、ハヴェル自身が関わった、ナ・ザーブラドリー劇場での初演公演のプログラムを考察の対象に加える。これによって、観客の知覚における「不条理」による世界の見方の転換が、劇場公演ではどのように目指されたのかを検証する。この視点は、自身の創作活動のなかでも劇場の「社会性」に強い関心を寄せていたハヴェルの、原体験となる実践を明らかにすることにもつながる。

【研究発表会 報告要旨】（博士論文）

ジョージア近代文学研究におけるポストコロニアリズムの諸問題
――ポストコロニアル・環境／動物批評の試み

五月女 颯（日本学術振興会特別研究員）

ロシアのポストコロニアル研究、特にジョージア（グルジア）やコーカサスを対象とする研究は従来、主としてロシアの文学や歴史を論考の対象としてきたが、ここにはともすればロシア側からの視点のみに留まってしまう危険がある。スピヴァクやバーバといったポストコロニアリズムの論者たちが、植民者と被植民者の多様な交渉に注意を払ってきたことを考慮するならば、コーカサスの人々からの視点にもまた同様の注意を払わねばならない。

この立場から、本研究ではまず、作家イリア・チャヴチャヴァゼ（1837–1907）の文学テクストに注目する。チャヴチャヴァゼは作家としてのみならず社会活動家としても活躍し、ロシア帝国支配下にあった当時のジョージアで民族主義運動を牽引した知識人として著名である。ここでは、旅行記風の作品である「旅行者の手紙」（1861–1871）や中編小説「彼は人か!?」（1863）について論ずる。彼は、一方で、ペテルブルクで大学教育を受けた民族知識人として、教育や啓蒙、近代化を通して解放への道を探ったが、他方で、ロシアによる帝国主義的支配の有力なイデオロギーとしての「コーカサスの啓蒙」に対しては批判的である。このような二重の戦略は、バーバの言葉を使えば「擬態（ミミクリ）」「茶化し（モックリ）」として捉えることができ、きわめて植民地的なものである。

もっとも、このような態度にもまた一定の問題点がある。それは、このような戦略を用いたとえ植民地解放を果たしたとしても、啓蒙や近代性を唯一の尺度として自他の階層構造を再構築することで、結果として帝国主義や植民地主義を再演してしまうのである。本研究ではこの問題に対し、ポストコロニアリズムと環境批評や動物批評の協働を図る批評理論である「ポストコロニアル・環境／動物批評」（postcolonial eco/zoocriticism）を導入することで、ジョージア近代文学研究におけるポストコロニアリズムの議論をさらに深化させる。

その実践として、19 世紀後半のジョージア文学最大の詩人である、ヴァジャ＝プシャヴェラ（1861–1915）の叙事詩「蛇を食う者」（1901）を読解する。詩において、動植物をはじめとする自然は擬人化されて描かれる。擬人法は、ややもすれば人間についての寓話となり、自然の行為主体性（エージェンシー）を無視してしまう危険も孕む。だが作品では、自然が人間に自らの生命を差し出す場面が描かれることにより、自然の行為主体性が担保され、ひいては自然と人間は対等な関係にあるものとして表象される。このような世界観を本研究は、人間のみに限定されるヒューマニズムを非人間（ノンヒューマン）にまで拡張する「パンヒューマニズム」と呼ぶが、それは、例えば宮澤賢治の童話「なめとこ山の熊」にも共通する、同時代的な主題でもある。上述の問題点を前提にジョージア文学のポストコロニアル批評を再考するならば、ヴァジャの作品における自然の表象は私たちに、真にポストコロニアルな視座を供するものである。

【研究発表会 報告要旨】（博士論文）

脱出の希望、反逆の技法――ヴィクトル・ペレーヴィンのデビューから現在までを読む

笹山 啓（筑波大学）

本発表は、2020 年度に東京外国語大学に提出した同名の博士学位論文をもとに、現代ロシア文学を 30 年にわたって牽引し続け、今なお旺盛な執筆活動を続ける作家ヴィクトル・ペレーヴィンの創作の全体像を提示しようと試みるものである。

表題に掲げたふたつの言葉、すなわち「脱出」と「反逆」は、ペレーヴィン作品のなかで描かれる「自由／解放」が取り得るふたつの代表的な様態に対応している。1990 年代の作品群でペレーヴィンは、旧弊なソ連的メンタリティのしがらみから解き放たれ、「今ここ」から「ここではないどこか」へと飛び出していくことによって十全な自由を獲得できると考えていた。しかしその後、ロシアがソ連崩壊の痛手から徐々に立ち直っていくにつれ、代わって訪れた資本主義社会がもたらす閉塞感は払拭されないままに、かえってそうした「脱出」への期待は失われていく。そこでペレーヴィンが新たに取り組んだのが、構造化された権力関係の内部で、一個人の自由の領分を切り開くという課題であった。ここにきて、下位者から上位者への「反逆」による解放の可能性が見出される。拙論は、このように「脱出」のテーマから「反逆」のテーマへとペレーヴィンの創作の重心が移っていく様子を 3 章構成で、時系列に沿って分析したものであった。以下に各章の概要を示す。

第 1 章の主な分析対象は、ペレーヴィンの 1989 年のデビューから 1996 年の『チャパーエフと空虚』までの作品群である。「ゾンビ化」（1990）という、これまで比較的知名度が低かったエッセイの分析からスタートし、ペレーヴィンの初期長短編に頻出する「夢／睡眠」のモチーフの分析へと移ることで、その構成員の個性を抑圧し集団の論理に同調するよう迫るソ連のイデオロギーへの批判内容を精査した。

第 2 章では、1996 年の『チャパーエフと空虚』から 2004 年の『妖怪の聖典』までの作品群を分析対象とした。『チャパーエフと空虚』と『妖怪の聖典』では、「虹の奔流」という共通のモチーフがともにプロット上重要な役割を果たす。ソ連から資本主義ロシアへと物語の舞台を移し、ある種の創作上の蹉跌を味わったペレーヴィンが再度「虹の奔流」を『妖怪の聖典』で描くとき、そのモチーフにどのような変化が加えられたのかという点を論じた。

第 3 章では主に 2005 年『エンパイア V』以降の作品へと目を向け、プーチン登場以降ロシアの地で勃興した新たなナショナリズム（ネオ・ユーラシア主義）や、ロシアの保守的なジェンダー観に抵抗すべく現れたフェミニズムなどを背景に展開される、ペレーヴィンの権力論を概観した。ここでは、2000 年代に入ってからの長編作品に共通して見られる「ヒエラルキーの崩壊」、すなわち上位者と下位者の関係のラディカルな組み換えというモチーフが、社会からの「脱出」をもはや志向できなくなった現代社会において作家が提示する自由への道筋であるということを論証しようと試みたのであった。

【規約・執行部】

日本ロシア文学会関東支部規約

1988 年 10 月 5 日制定・支部登録
2017 年 6 月最終修正

第 1 条　本支部は日本ロシア文学会関東支部と称する。
第 2 条　本支部は日本ロシア文学会の会則に基づいて，その目的達成のために独自に次のような事業を行う。
(1)共同の研究ならびに調査。(2)研究発表会・講演会の開催。
(3)機関誌の発行。(4)その他本支部の目的を達成するために必要な事業。
第 3 条　本支部は原則として，関東地方および新潟県在住の日本ロシア文学会会員をもって組織する。
第 4 条　本支部について次の機関をおく。
(1)総会　(2)運営委員会
第 5 条　総会は本支部の最高議決機関であり，毎年 1 回開催するものとする。ただし必要に応じて臨時総会を開くことができる。 総会の議決は出席会員の過半数によって成立する。
第 6 条　運営委員会は支部長と運営委員をもって構成し，支部の運営にあたる。
第 7 条　本支部に次の役員をおく。
(1)支部長　(2)運営委員　(3)事務局長　(4)監事
第 8 条　支部長は支部選出の理事の互選により選出する。
第 9 条　支部長は本支部を代表し，支部の運営を統轄する。
第 10 条 運営委員は，別に定める選出規定により選出する。
第 11 条 運営委員は，運営委員会を構成し，支部の運営を分担する。
第 12 条 事務局長は，支部事務局担当大学選出の運営委員とし，会計・事務を担当する。
第 13 条　監事は，別に定める選出規定により選出する。
第 14 条　監事は，年度末に会計監査を行い，総会でその報告を行う。
第 15 条 役員の任期は 2 年とし，重任を妨げない。
第 16 条 本支部の経費は会費，補助金その他の収入をもってこれにあてる。
第 17 条 会費に関する規定は別に定める。
第 18 条 本支部は，事務局をおき，本支部の会計および事務全般を委ねる。事務局設置の規定は 別に定める。
第 19 条 運営委員会は毎年決算報告を作成し，総会の承認を求めなければならない。
第 20 条 本支部の会計年度は 4 月 1 日に始まり，翌年 3 月 31 日をもって終わる。
第 21 条　本規約の改正および諸規定，内規の制定・改正は総会の議決による。

支部規約に関わる規定

1)　第 10 条に関わる運営委員選出規定
支部事務局分担大学所属会員，および関東地方と新潟県にある日本ロシア文学会事務局分担大学所属会員がそれぞれの大学から 1 名の委員を選出したのち，支部長とそれら委員が上記大学所属会員以外から若干名選出する。

2) 第 13 条に関わる監事選出規定

監事は，支部会員から 2 名を支部長が指名するものとする。

3) 第 15 条に関わる会費規定

年額 1000 円とする。会費の改訂は支部総会の承認を要するものとする。

4) 第 16 条に関わる事務局設置規定

支部事務局は，関東地方と新潟県にある大学のうち，原則として所属会員が 2 名以上いる大学が協議の上，もちまわりで適宜順番を決め，2 年ずつ担当する。ただし日本ロシア文学会事務局分担大学はこの限りでない。

5) 第 8 条に関わる理事候補選出規定

支部選出の理事候補については、支部総会で承認を受けた選挙管理委員会が選挙を実施する。支部選出分 14 名のうち、10 名は選挙結果に基づいて選び、4 名は支部長が運営委員会の承認を得た上で指名するものとする。ただし、選挙結果によって選ばれる 10 名分については、三期連続の選出（過去の支部長指名枠での選出を含め）を認めない。なお、この規定は 2017 年度の理事選挙から適用される。

現行執行部

支部長： 沼野恭子

運営委員： 秋山真一、朝妻恵里子、大森雅子、加藤百合、古賀義顕、寒河江光徳、佐藤千登勢、鈴木正美、野中進、乗松亨平、前田和泉、八木君人

事務局長： 八木君人

監事： 朝妻恵里子、乗松亨平

日本ロシア文学会 関東支部
研究発表会・総会

2021年 6月5日（土）13：00-18：30

13:00 開会：支部長挨拶

[修士論文成果報告部門]

13:10–13:40 **中岩 諒**（東外大院） 司会：阿出川 修嘉
「ロシア語の比較級を用いた文における基準と対象の格の合致について」

13:45–14:15 **新田 愛**（東大院） 司会：梅津 紀雄
「『想像の西側』としてのJ. S. バッハ――A. シュヴァイツァーの『バッハ』露訳（1964）受容を事例に」

14:20–14:50 **佐藤 大雅**（東外大修士課程修了） 司会：鈴木 正美
「アゼルバイジャンにおけるジャズと、〈ジャズのメッカ〉の誕生について」」

14:55–15:25 **赤渕 里沙子**（早大院） 司会： 伊藤 愉
「A. B. ルナチャルスキーの『新しい宗教』と文化政策」

15:30–16:00 **粟生田 杏奈**（東外大院） 司会：熊野谷 葉子
「19～20世紀ロシア文化に見られるクマの表象」

16:05–16:35 **豊島 美波**（カレル大院） 司会： 伊藤 愉
「ヴァーツラフ・ハヴェルの『ガーデンパーティー』と『通達』における不条理
――世界の見方の転換手段として」

[博士論文成果報告部門]

16:40–17:15 **五月女 颯**（日本学術振興会） 司会：八木 君人
「ジョージア近代文学研究におけるポストコロニアリズムの諸問題
――ポストコロニアル・環境／動物批評の試み 」

17:20–17:55 **笹山 啓**（筑波大学） 司会：貝澤 哉
「脱出の希望、反逆の技法
――ヴィクトル・ペレーヴィンのデビューから現在までを読む」

18:20–18:30 支部総会

Zoomによるオンライン研究発表会です。申込フォーム：
https://zoom.us/meeting/register/tJIlf-isqz8vG9weg2ex29vf54c3b3hZ8BA9

日本ロシア文学会 関東支部事務局 早稲田大学 文学学術院 八木君人研究室 kanto.yaar@gmail.com